

キリストの教えた「愛する」を 日本語におきかえたら

杉田 稔

「敵をも愛せよ」この言葉を聞いて、「それはムリな相談だ。自分に害を加えた敵が好きになれるはずがない」と思われた方も多いと思います。

カトリックの神父なので、私はこのような反応を、たびたび経験しました。

ところで、「そんなできっこないことを命じるキリストなんか好きになれない」などと結論するのは、ちょっと待って下さい。

キリストの言う「愛する」と日本語の「好きになる」とはイコールと限らないのです。

日本語には「愛する」を言いかえることのできるさまざまな言葉があります。

「いとおしむ」「思いやる」「あわれむ」「かわいがる」「こいしたう」などそうですし、「あの子は親に大切にされている」「あの子は親の愛をゆたかに受けている」と同じニュアンスで使うことができます。

四百年前のキリシタンは、今ならば「神の愛」とでも訳すところを、「デウスの御大切(ごたいせつ)」と言っていました。

イスラエル民族をエジプトでの奴隷生活から解放したヤハウェを、また世界中の人間のひとりひとりを無知と迷いと負い目の奴隷から解放するため御子イエスを世に送った天の父を、日本の八百万(やほよろづ)の神々と混同されたくないばかりに、わざわざラテン語のデウスをそのまま使い、仏教的な上から下へのあわれみのニュアンスを嫌って「慈悲」を避けて「たいせつ」を持って来たのだろうと、言われています。

一つの単語の概念のひろがりと中味、またそのニュアンスは、文化圏ごとに、その負って来た歴史と共に違ってゆきます。

ドイツ語のリーベも、英語のラヴも訳せば同じ「愛」ですが、英語のアイ・ラヴ・ユーと、ドイツ語のイッヒ・リーベ

・ディッヒの使い方はかなり違うようです。

英語圏では何度繰り返してもいいこの表現は、ドイツ語では「誓い」のニュアンスが濃いため、ふつうなら一生に三度、つまり求婚、婚約、婚姻の際にだけ口にされるもので、他には戦時の召集や単身赴任のように、止むなくしばらく離れて暮さねばならぬ夫婦や婚約者の別れのことばとして用いられるのだそうです。

いまの日本ではどうでしょう。

昔なら「いろ」「こい」と表現されたエロスのものが、「愛」のイメージの中心に置かれているのではないのでしょうか？

もちろん今でも、兄弟愛、師弟愛、郷土愛、愛国心などの言葉は残っていて、その愛にはエロスの要素は含まれていないでしょうが、これらの愛について耳にすることは非常に少なくなったように思えるのです。

では、キリストの教えた「愛」はどうだったのでしょうか。「他人にして貰いたいと望むことを、そのままひとにしてあげなさい」(マタイ7章12節)

「愛してくれる人を愛したとて、何か特別なことをしたのだろうか、天の父は善人の上にも、悪人の上にも恵みの雨を降

らせ、日をのぼらせられる。隣人も敵も区別なく愛そうとするとき、あなた方は天の御父の子らしくなれるのだ」(マタイ5章43―48節参照)

「いと小さき者のひとりにしてやったことは神にしてさしあげたこと、しなかつたことは神にしてさしあげなかつたことだ」(マタイ25章31―46節参照)

これらを味わい返して思うのですが、キリストの言いたいことをひらたく言いかえるなら、「誰でも差別せずに『兄弟』として受け入れ、兄弟として振舞いなさい」となるのではないのでしょうか。

ところで幼な児の間には人種差別はありません。親の社会的地位にも、貧富の差にも、うわべの美しさにも、みにくさにも、幼児はこだわりません。「あんな子と遊んじゃダメ」と親が言うとき、溝ができてゆくのです。

だからこそ、「幼な児のようでなければ神の国には、はいれない」(ルカ18の17参照)とキリストが言ったのでしょうか。でも大人の私達が、自愛心を乗り越えて、「ひとごとではないと取り組む愛」、「ありのままを受け入れる愛」、「損する喜びを知る愛」を身につけ、まわりにひろめて行ってこそ、この地上に真の平和と、人間の喜びがやって来るのではない

でしょうか。

キリストが教えた

「ゆるす」ということば

イスラエルの首都エルサレムの新市街に、日本人が虐殺記念館と呼びならわしている建物があり、ナチスが迫害し、虐殺したユダヤ人六百万人の記録が展示されています。

人間の尊厳の最後のひとかけらまで無視され、汚され、抹殺されて行ったユダヤ人たちのむごたらしい、いたましい写真や遺品が、順路をたどる訪問者に、まるでこれでもか、これでもか、とつきつけられ、聖地巡礼の私達一行は、息苦しいどころか、終りごろには本当に、胸が悪くなってしまうました。

でも、最後のパネルで、私達はホッと息をつき、救われた思いがしたのです。

そこには、ヘブライ語と英語で、大きく書かれています。

“We will never forget, but will forgive!”

「決して忘れはすまいぞ、でも、我々はゆるすのだ」とでも訳せるでしょう。

ホテルへ帰る巡礼バスの中で、「ゆるす」をめぐる議論がはずみしました。

日本人は、こんな厳しい「ゆるそう」を知らない……日本人は「ゆるす」ためには「忘れる」しか方法ないと思いつているのではないだろうか……私達は「うらみを忘れて、いつの間にか、どうでもよくなる」のを、ただ受け身に待つのが常で、「ゆるす」ということを、積極的な意志の問題として、とらえてはいないのではないだろうか……などと。

キリストはユダヤ人の血筋で、ユダヤ人に、ユダヤ人の感じ方、考え方にそって、当時の人々のことばで語ったのでした。

だから、いまのユダヤ人のメンタリティーの「ゆるす」を理解しようとするには、キリストの真意が何を志していたかを理解するために重要だと思ったのです。

一九七五年の春のことでした。

ところで二千年前のキリストは、幾度ゆるすべきかと弟子

からたずねられた時、次のようなたとえ話をしました。

一万タラントの借金を、主人に免じてもらった(つまり借りて棒を引いて貰った)人が、百デナリ(一万タラントの六〇万分の一)の貸しを、ひとから取り立てようとした。それを聞いた主人は怒って「私はお前の借りを免じてやった。お前も、あの仲間をあわれむべきではなかったか」と言い、借金を全部返すまでと、牢役人に引き渡した。

お前たちが一人一人、心から兄弟をゆるさないなら、私の天の父も同じようになさるであろう(マタイ18章21—35節参照)。

ここに「ゆるす」「免ずる」となっているものの原語はギリシャ語の「アフィエミイ」なのですが、この「アフィエミイ」は、マタイ4の20やマルコ1の18では、漁師がキリストに召された時、網を捨てて、(別の訳では、そのままにして)キリストについて行った、の「捨てる」「そのままにする」の意味で使われているのです。

つまり、キリストが教えた「ゆるしなさい」は、日本人の傾きがちな心情的なものではなく、もっと具体的、且つ即物的な「貸しがまだ返されずに残ってはいようと、それでよいことにする」そのままにしておく」とか、「受けた損害な

り、恨みなりをそのままに、取り合わない事にする」「それを無視する」といった内容のように思えます。

そうだとしたなら、日本語の「恨みを水に流す」とか「そのことは初めから無かったことにする」あたりが最も近い表現になるのではないだろうか。

でも、「目には目を、歯には歯を!」という復しゅうを正義と考えていた当時のセム族のメンタリテイ(実は現代のアラブも多分そうなのでしようが)の中で、ゆるしを説いたキリストは、それだけで、社会を乱す革命児、危険分子と見なされたことでしょう。

しかし、私の理解した限り、キリストは「ゆるし」を叫び続けたいわけにはゆかなかったのです。何故なら、キリストは「神は父、敵も含めてすべての人は皆兄弟」という世界をこの地上に作ろうとし、前にも述べたような「敵をも愛せ」と教えたのです。

この種のゆるし、つまり敵が自分に加えた損害も、侮辱もそれが忘れ難かろうとも、取り合わない、無視すること、あってこそ、敵を再び「兄弟」として受け入れ直すことが可能となる。だから、キリストは、殺される危険に直面しても、ゆるしを説き続けたのでしよう。(カトリック司祭)